

# ふりかえれば、サバンナ

西木正



# いかにえれば、サバンナ

## 西木正明



ふりかえれば、サバンナ

昭和六十年十一月十五日 印刷

昭和六十年十一月二十日 発行

定価 一一〇〇円

著者 西 木 正 明

発行者 深 見 兵 吉

発行所 光 風 社 出 版

東京都文京区関口一三三二四

郵便番号 一一二

電話番号 〇三(二〇四)二四四一

振替東京八一二九一三

印刷 誠 宏 印 刷

製本 越 後 堂 製 本

○乱丁、落丁の場合はお取り替えます

— ぶりかえれば、サバンナ —  
目次



—  
ふりかえれば、サバンナ

—  
5

—  
ロスの海鳴り

—  
47

—  
スタジオ・カリフォルニア

—  
93

—  
アンカレジの女ヤスコ

—  
135

—  
凶銃

—  
169

装幀

篠田昌三

ふりかえれば、サバンナ





遠くでニワトリが鳴いている。壁のすき間からさしこんだ朝日が顔にあたっているらしく、まぶたの裏が白い。隣のバラックに住んでいるチャド人が、コーランをうなり出した。

十月初旬の朝だが、赤道直下のこの町では真夏と同じである。室内は、すでに暑くなり始めている。

森哲也は眼を閉じたまま寝返りを打った。ベッドのスプリングがきしみ、脇腹にマットからはみ出ている綿がさわるのが感じられる。

「ウバンギ……起きる？」

床の上から、かん高い子供の声が出た。だいぶ前から目覚めていたらしく、眠そうな響きはない。

何時だろう……。そう思いかけて、森は苦笑した。時計など、とうの昔に失った。ナイロビに来て十日後に、質屋に入れて流してしまった。

「ねえ、ウバンギ」

床の上にバナナの葉を敷いて横になっていた、コーヒー色の肌をした男の子が起きあがった。年齢は恐らく十歳に満たないだろう。本人も正確な歳はわからない、という。やせて眼が大きい。髪の毛は、このあたりの住人と違ってまっすぐな直毛だ。

「ウバンギ」

「うるさいな。お前、腹がすいているのか？」

返事がない。じっとこつちを見つめている氣配だけがする。ついに根負けして、森は上半身を起した。

「昨夜のウガリが残ってるだろうが。勝手に食ったらどうだ」

「食べていいの？ ウバンギはどうする」

「僕はいい。お前、食え」

スワヒリ語でそう言うと、森はまたベッドの上に倒れこんだ。昨日まで、持病のマラリアの発作が四日続いた。体力が落ちてゐる。昨夜も、食い物がろくにのどを通らなかつた。前夜、男の子が用意した、トウモロコシの粉を練ってまんじゅうのように蒸しあげ、動物の内臓と共に煮こんだケニアの主食ウガリが、ほぼひとり分残っている。

もともと森の分なのだが、今朝もまだ食べられそうにない。

「じゃ、俺が食っちゃうよ」

男の子は申し訳なさそうにそう言うと、古ぼけた鍋の底から、ウガリを手ですくって食いはじめた。舌を鳴らしてうまそうに食う音を、森はおだやかな表情で聞いていた。細おもての、やや頬骨の張った顔。途中に小さな段がついている、とがって細い鼻。同じようにとがっている顎は、一年半余りそっていない髭の中に埋もれている。

少年が食い終えて、ふうつと溜息をつくのが聞えた。森が顔を動かして眼を開いた。切れ長の

「<sup>ひと</sup>重の眼が、充血して赤くなっている。

「おい、ムッサ」

「なに？」

男の子は、立ちあがって森のベッドの脇に来た。

「お前、腹がくちくなくなったのなら、ひとつ走り出来るな」

「うん」

「じゃあな、ジョモの作業場へ行つて、エボニーの切り株を二本、受取つてこい」

「二本だね」

「そうだ、二本だ」

森は指を二本、たてて見せた。学校などにまるで縁がなかったこの子に、数の概念を理解させるのは大変だった。しかし、同居して一年近くなる今は、どうにか不自由がなくなった。

「じゃ、行つて来る」

ムッサは、森のベッドの足元にあった古いリュック・サックを背負うと、勢い良く外に駆け出して行った。

「お前、気をつけろ。ナザレ街は昼間でもやばいぞ」

森は、やせた小さな背中に声をかけた。

「大丈夫だよ」

遠くからムッサの声がした。森は目尻にしわを寄せて笑った。それは自分の子を見送る、父親

のような笑いだった。彼自身、ムッサに対してそんな気持ちを持った自分に驚いている。それは彼の当初の計画からすれば、およそ予定外のことだった。だいたい、この生活自体が、予定していたこととは大いに違う。

約一年半前、森哲也は赤道アフリカの国ケニアにやって来た。

森はそれまで、生活の基盤をアメリカのニューヨークに置いていた。ブルックリンに小ざい的なアパートを借り、妻の栄子とともに、快適な時間を送っていた。彼はしばしば、日本の美術系雑誌や、新聞の文化欄などにも顔を出す存在だった。

——森哲也が語る、現代アメリカの彫刻事情。  
とか、

——新進気鋭の日本人彫刻家、ニューヨークの国際ビエンナーレに入選。  
などというタイトルを付され、その活躍がはなばなしく伝えられた。

中部裏日本の寒村の出身である森が、そこまですなれたのは、妻の実家の力が大きくあずかっていた。森と栄子はT美大の同級生だった。栄子の父は中堅どころの製薬会社の、オーナー社長である。栄子はいわば教養として彫刻を学んでいた。アルバイトをしながら通学し、なにがなんでもこの世界で食えるようにならねばならぬ森とは、学ぶ動機が違う。

身体全体も目鼻立ちも大造りで、派手な美貌の持主である栄子は、常に何人ものボーイフレンドに囲まれながら、豪華なクルマで学校に通って来た。そんな彼女が、最終的に森を選んだのは、彼の馬車馬的な彫刻へののめりこみだった。他の遊び半分の男共とは、まるで異質の迫力を感じ

させた、と後に栄子は森に述べた。

「あなたはどこか狂ってるのよ。わたしには、そういう人が合っているの」

卒業後結婚したふたりは、ニューヨークに居をかまえた。栄子の親がスポンサーだった。現代美術は、アメリカを軸にして動いている。そして、ニューヨークはその中心だった。この町には、世界中から野心にあふれた芸術家の卵が集まって来る。

世界の最前線ともいべきニューヨークで、自分の可能性を試したいという娘婿の希望を、栄子の親は快く受け入れてくれた。またそれを認めさせるだけの評価を、森はすでに周囲から受けていた。

日本にいた間にも、すでに情報として知っていたことだが、ここ数年ニューヨークの彫刻家たちは、ブラック・アフリカに眼を向けていた。

二十世紀初頭に、ピカソやマティス、ブラック等の巨匠が、ブラック・アフリカの原始美術を徹底的に研究し、自分の仕事に取入れて、当時の閉塞へいそくされた状況に風穴をあけた。

八十年後の今、同じような動きが出ている。あらゆる技法がきわめられ、洗練されつくした感のある現代彫刻。それにあきたらない思いを持っている彫刻家たちが大勢いる。彼らはあらためてブラック・アフリカの原始彫刻に、突破口を見出そうとしていた。

森哲也・栄子夫妻がニューヨークに向ったのは、そういう気運がいちだんと高まった時であった。

森もこの潮流に乗ることにした。熱心にアフリカ原始美術の資料を集め、実物を収集して展示

している美術館や博物館を見てまわった。

だが、今ひとつ納得出来なかった。靴底から足の裏をかいているような、もどかしさが常にあった。美術館の立派な台の上や、ガラス・ケースにおさめられた彫刻は、どこかデスマスクに似ていた。本来持っていたはずの、躍動感がないのだ。展示場の空気になじんで、表情までがよんでいた。線やふんいきを盗み取るという功利的な狙いにも、それらはあまり役に立たなかった。そういう場所に展示されている彫刻のエッセンスは、すでに誰かの手によって、現代彫刻の中に取り入れられていた。

——これは、アフリカへ行ってみるしかない。こういうコレクションになった物ではなく、実際に民衆の中で息づいている彫刻をじっくり見なければ……。

そんな思いが、森の中に広がりはじめた。いったんそう思いはじめると、もうブレーキが効かなかった。しばらく忘れていた、狂気に似た思い込みが、彼の頭の中を支配した。

「アフリカへ行ってみたいんだが」

森は、栄子に相談した。なんといっても、スポンサーは彼女の父親だ。森自身、日本の彫刻界に多少は名前が売れはじめたとはいえ、まだそれに収入が伴っていない。何か事を起すには、ぜひとも栄子の実家の協力が必要だった。

「あら、素敵ね。あたしも長い間、アフリカには行ってみたいと思っていたの」

栄子はそううれしそうに言った。しかしこの言葉に、森は安心したわけではなかった。彼女が、ニューヨークの生活をこの上なく気に入っているのを知っていたからだ。

森が考えているアフリカ行は、短期の旅行ではない。すくなくとも一、二年は現地に住んで、まだアメリカや日本に紹介されていない土俗的な原始彫刻を観察し、自分の物にするつもりでいた。

それを言うと、はたして栄子は反対に転じた。

「冗談じゃないわ。そんな所に住みこんで何をしようと言うのよ」

もともとわがままいっぱいに育っている。いったん言い出したら、まず後に引かない。世界中に名を知られた人間たちとの交流、連夜のパーティ……。

「こんないい環境を棄てて、あなたはどこで自分の才能を磨こうというの？」

栄子は、世界中どこをさがしたって、こんな芸術的な環境は他にない、あなたはここでもっと修業すべきだ、と言い張った。しばらくかみあうはずのない口論が続き、やがてあっけなく終局が来た。

昨年の春先き、いつもの美術館めぐりを早目にきりあげて、森はアパートに帰った。前日から微熱があったのがこじれたらしく、気分が悪くなったからだだった。

アパートのドアは鍵がかかっていた。栄子はどこかに出かけたのだろうと思い、森は持っていたキーでドアを開き、中に入った。そして、居間の入口で棒立ちになった。

ソファの上で素裸の栄子が、同じく全裸のたくましい黒人の男と、コカインのカプセルを割って嗅いでいた。人の気配に、栄子は顔をあげて森を見た。

「あら、あんた」



驚いた様子も見せずに栄子は言った。すでにコカインが効きはじめ、瞳がすぼまっていた。相手の黒人は、森もパーティーで何度か顔をあわせたことのあるイラストレーターだった。彼も森を見やったが、白い歯を見せて、「ハイ」と言っただけだった。

やがて栄子は黒人に抱きついて行きながら、「ニューヨークにいたって、ブラック・アートの研究ぐらいできるんだから」と言った。森は黙ってアパートを出た。そして、二度ともどらなかった。

一か月後、彼は東アフリカのケニアの首都、ナイロビに姿を現わした。バック・バックを背負い、Tシャツにジーパンという姿だった。

寒いニューヨークと異なり、あたりは陽光に満ちていた。空港を出、バスでしばらく走ると、サバンナの地平線に、ナイロビの高層ビル群が蜃気楼のように浮びあがって来た。二十六歳の彫刻家、森哲也は、一からスタートしなめという思いこみに眼をすわらせて、未知の街のたたずまいをにらみつけていた。一九八二年三月末のことである。

## 2

「ジャンボ（こんにちは）！」

入口で野太い声がした。

「入んな」